

境界線上の絵画

MOMASコレクション 2026.9.5～11.29

「特集 堀浩哉：ゼロからの実践」

MOMASコレクションの堀浩哉(1947-)の特集で紹介する絵画の一つが、『波光 13』(1994年)です。墨とアクリル絵具を用いて、横幅350cmを超える大画面に描かれています。画布に和紙を貼り、水平に走る黒い帯と、垂直に林立する赤・黒の線が交差するように描かれています。絵画は水平・垂直に構造化されていますが、線のゆらぎや粗密、和紙に浸透する絵具の違いや濃淡が、画面に微かにぎわめくような印象をもたらしています。制作プロセスは内面化され、視覚的構造、物質的表情、身体之余韻が折り重なり、西洋の絵画にはない独自の絵画空間を孕む光景が屹立しています。



堀浩哉『波光 13』1994年 墨、アクリル、和紙、カンヴァス

美術の制度を解体し、ゼロ地点へ

このような絵画を描くまでの堀の軌跡は、決して単線的ではありませんでした。堀が多摩美術大学に入学したのは1967年です。60年代は美術、演劇、映画等が交差し、前衛芸術や反芸術が注目されていました。「前衛」や「反」という概念は、従来の価値観の反措定として成立しうるもので、大局的にはそれに依存します。しかし60年代末において、依存する相手であった近代の価値観が揺らぎ、最早、前衛芸術や反芸術が意義を持ち得なくなった状況を、若き日の堀は鋭敏に感じ取っています。こうして近代の文化的構造の問題を見据えつつ、美術を巡る様々な制度を解体し、ゼロ地点に降り立ち、あるべき表現を模索し始めます。その過程では、絵画とは関係のないようにみえる活動も行っています。

例えば、1967年には自己と共に近代的な価値観を葬り去るイベント《自己埋葬儀式》を行い、首のない人形をぶら下げ、東京駅や銀座を練り歩きます。学生紛争の機運が1968年から高まると堀も闘争に加わり、学内にバリケードを設け造形作家同盟展を1969年6月に開催します。同年7月には学内組織を越えた美術家共闘会議(美共闘)を結成し、堀は議長を務める一方、「絵筆は折らない」ことを信条とし、1969年5月の第9回現代日本美術展に「鑑賞を拒否する」を出品します。絵画自体を批判し、枠と布という物体にまで解体されたこの作品は、それさえも美術として見ようとする私達の内なる制度も批判しているのです。



堀浩哉『鑑賞を拒否する』1969/1992年 麻布、木(2点組)

1970年には美共闘の課題を引き継ぎ、美術表現の在り方を問う運動体美共闘REVOLUTION委員会を彦坂尚嘉らと立ち上げます。

同委員会のプロデュースのもと、美術館や画廊と異なる場所でイベントを行ったり、機関誌の『美術史評』や『記録帯』を発行したりしながら、今日で言うコレクティブのような活動を展開します。今回展示をする《REVOLUTION》(1971年)はその一端を示す貴重な作例で、渋谷の小劇場「HAIR」で開催された堀の個展の展示物の一部です。「壁」に纏わる単語を辞書で引き、その説明を分節して「REVOLUTION」という言葉を挿入した文を、同委員会のメンバーがカラフルなクレヨンで多数のシートに綴っています。



堀浩哉《REVOLUTION》(部分) 1971年 クレヨン、紙

同委員会の活動に並行し、堀は1972年から《Act》、《調書》、《MEMORY-PRACTICE》と題する一連のイベントも行います。例えば、画廊の壁面に木枠を設けて布をかけ毎日移動し続けたり、レコーダーやビデオ等も活用し、文章、日常の音や映像などを分節、反復したりしています。事物と表現、現実と虚構が揺らぎ、文脈や意味が解体されていくような実験的な試みです。

また同時期に、絵画の要素に焦点をあてる制作も手掛けています。三原色(赤、青、黄)をベタ刷りのシルクスクリーンで塗り重ねるシリーズ《THREE PRIMARY COLORS -PRACTICE》や、顔料を付けた糸を張り画布にその糸を弾いて線を描画し、水平に線を集積させるシリーズ《LINE-PRACTICE》を試みています。色と線を主題とするこれらの実践からは、手で描くことを避け機械的でシステムティックな制作に委ねながらも、不可避的に現れる絵画表現の萌芽のようなものを読み取ることができます。

「絵画」の中心へ向かう

こういった活動の最中、1977年に堀は第10回パリ・ビエンナーレに招聘されます。新設されたパフォーマンス部門への参加となり、シリーズ《LINE-PRACTICE》を出品したほか、《MEMORY-PRACTICE》から派生した《DANCING-AFFAIR》と《READING-AF-

FAIR》を、同ビエンナーレやパリの画廊で上演し好評を得ます。ところが滞在中に触れたモネの最晩年の絵画を、自らの問題意識に引き寄せて考えたことがひとつの契機となり、この年を境にイベント(パフォーマンス)から離れ、帰国後は絵画制作に向き合うようになります(註1)。その時の心境を、堀は後にこう振り返っています。

「(前略)77年にパリのマルモッタン美術館で、モネ最晩年の連作絵画を見たときに、ある啓示を得たと感じた。一連の睡蓮の大作の後に、視力を失いながら描き続けたジヴェルニーの庭を描いた小さな未完の何点か。(中略)70年代初めの「絵画の死」とは、実は近代絵画のリニアな一方向が行き詰まりになっただけであることは、すでに明らかだと感じてはいたし、それとは別の道への根拠の一つがこのモネ最晩年の、つまりはモダンの最盛期の「綻び」の中にあると感じられたのだ。(中略)ただ、はっきりと覚えているのは、自分の三原色による絵画を「未生(生まれる前)の絵画」あるいは「実生(種子から発芽したばかり)の絵画」であると位置づけして、なにが霧が晴れるような気分になり、さあ、これから「絵画」の中心へ向かおうと思ったということだった。」(註2)

絵画の中心へ向かうという言葉は、70年代のイベントや実践が、堀にとって絵画の圏外のもではなかったことを意味しています。それらを通して堀は絵画のできる限り周縁を手探りし、外部に晒されるその周縁で体得したものを、従来とは位相の異なる絵画へと接続しようとしたと言えるでしょう。

堀は70年代初頭から自らの活動を「境界線上に立つ」という言葉で語っています。煩わしい外部世界から離れ内部に安住するのではなく、内部の規範から逃れ自由を求めて外部に向かうのではなく、批評精神を駆動し続けるには、常に境界線上に留まる必要があることを説いています。絵画の内的な規範とその外部にある世界が拮抗する境界線上に、あえて精神を据えることから生成される絵画表現。それこそが、堀が目指そうとしている絵画ではないでしょうか。(H.I.)

註1. 休止していたパフォーマンスは1998年から再開され、堀浩哉、堀えりぜ、畠中実の3人で「ユニット00」を結成して活動した。また、70年代の《MEMORY-PRACTICE》の続編として、2000年から翌年にかけて、日記のようにビデオで風景を記録したものと、同日の新聞等の言葉を素材にした作品も制作している。

註2. 堀浩哉『工場日誌 2013・8-9』『滅びと再生の庭ー美術家・堀浩哉の全思考』現代企画室、2014年、44～45頁

MUSEUM NEWS 2026.10 ▶ 2026.12

内間安理・俊子展 色を織り、記憶を紡ぐ

企画展

10/10(土)～11/17(日)

2階展示室

観覧料 | 一般1400円(1120円)、大高生1120円(900円)

関連イベント

各イベントの詳細は当館ホームページをご覧ください。



講演会

2階講堂

1/9(土) ※開催時間等の詳細は決定次第、当館ホームページでお知らせします。

講師 | 岡崎乾二郎(造形作家、批評家)
定員 | 80人(当日先着順) 費用 | 無料

■ レクチャー「内間俊子とその時代」 2階講堂

12/20(日)15:00～16:30(開場は14:30)

登壇者 | 桑原規子(本展学術協力者)、関直子(当館特任館長)、佐藤あゆか(当館学芸員)

定員 | 80人(当日先着順) 費用 | 無料

■ ミュージアム・シアター 1階階センターホール

ピアノコンサート

「内間夫妻によせるピアノ演奏会」

11/1(日)15:00～15:30

出演 | 山本香紫(ピアニスト) 費用 | 無料

曲目 | バダジェフスカ「乙女の祈り」、武満徹「遮られない休息」ほか

※ご鑑賞の座席には限りがあるため、立ち見となる可能性があります。

■ ワークショップ 3階創作室

「内間安理・俊子に学ぶ多版多色の木版画」

11/29(日)13:00～17:00

講師 | 関優花(美術作家・版画家／版行動メンバー)

対象 | 高校生以上 定員 | 15人 費用 | 600円

※事前申込制(電子申請)、応募者多数の場合は抽選

※申込方法やワークショップの詳細は当館ホームページをご覧ください。

■ 担当学芸員によるスライドレクチャー 2階講堂

11/23(月・祝)15:00～16:00

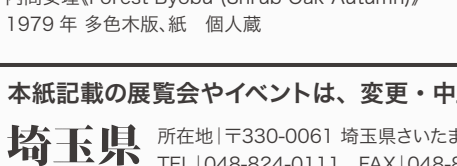
定員 | 80人(当日先着順) 費用 | 無料

■ 担当学芸員によるギャラリートーク 2階企画展示室

10/18(日)15:00～60分程度

12/13(日)15:00～60分程度

費用 | 企画展観覧料 ※12/13は手話通訳付き



内間安理『Forest Byobu (Shrub Oak-Autumn)』1979年 多色木版、紙 個人蔵

MOMAS コレクション

収蔵品展

9/5(土)～11/29(日)

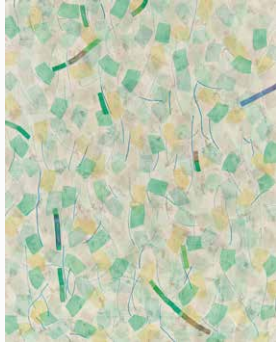
11階展示室

【セクション】シャガールほか

【特集 堀浩哉：ゼロからの実践】

観覧料 | 一般200円(120円)、大高生100円(60円)

※11/14(土)は「県民の日」のため無料



堀浩哉『池へ 81-5』1981年 アクリル、カンヴァス、パネル

12/5(土)～2/28(日)

11階展示室

【モネ没後 100 年によせて一光を描く】

【雪月風花を愛でる一大熊家コレクションから】

観覧料 | 一般200円(120円)、大高生100円(60円)



クロード・モネ『ジヴェルニーの積みわら、夕日』1888-1889年 油彩、カンヴァス

■ アーティスト・トーク 2階講堂

「特集 堀浩哉：ゼロからの実践」関連イベント

10/25(日)15:00～16:30(開場は14:30)

出品作品や同時代の状況について、作者が語ります。

講師 | 堀浩哉(出品作家)

聞き手 | 平野到(当館学芸員)

定員 | 80人(当日先着順) 費用 | 無料

■ コレクション・トーク 11階展示室

学芸員が展示作品から1点を選んで解説します。

費用 | 10/31、11/14は無料

12/6はMOMASコレクション観覧料

10/31(土)15:00～15:30

担当学芸員 | 篠原優

作品 | ヘリット・トーマス・リットフェルト『ジグザグ』

デザイン:1932-1933年 | 製品化:1935年

11/14(土)15:00～15:30

担当学芸員 | 佐伯綾希

作品 | 長谷川潔『二つのアネモネ』1934年

12/6(日)15:00～15:30

担当学芸員 | 五味良子

作品 | 杉浦邦恵『Hoppings '96 F (posi3)』1996年

アート体感ワークショップ MOMASのとびら

フリープログラム以外は、全プログラム事前予約制です。当館ホームページからお申込みください。



※ 応募が定員以上の場合は、抽選とさせていただきます。
※ 開催日が複数あるプログラムは、いずれも同じ内容を実施します。複数の実施日にお申込みできますが、ご参加いただくのはそのうち1日のみとなります。



昨年度「もすまつり」の「わくわく鑑賞ツアー」の様子。今年度の11/14「もすまつり」も様々なプログラムを実施します。ぜひご参加ください。

■ 11月のプログラム 10/1(木)から申込受付

「もすまつり」

11/14(土)10:30～12:00、14:00～15:30

申込 | 不要 対象 | どなたでも 費用 | 無料

「工房」

11/28(土)13:30～15:00

対象 | 小学生～大人 費用 | 500円

■ 12月のプログラム 11/1(日)から申込受付

「みっつけ!」

12/5(土)、12/12(土)各13:30～15:00

対象 | 4～6歳(未就学児)＋保護者 費用 | 無料

「フリープログラム」

12/19(土)13:30～15:00

申込 | 不要 対象 | どなたでも 費用 | 無料

■ 1月のプログラム 12/1(火)から申込受付

「フリープログラム」

1/9(土)13:30～15:00

申込 | 不要 対象 | どなたでも 費用 | 無料

「工房」

1/23(土)13:30～15:00

対象 | 小学生～大人 費用 | 500円

ミュージアムショップおすすめ商品

ミュージアムショップで、お馴染み、ひびのこづえの人気ハンカチ柄のテキスタイルを使用した折りたたみタイプの晴雨兼用傘のご紹介です。さりげない刺繍がほどよく上品な印象をプラスしてくれます。コンパクトに折りたためるので通勤やお出かけにもピッタリです。アートを持ち歩くような感覚で晴れの日も雨の日も気分を明るくしてくれる一本としておすすめです。

展開サイズ
直径 | 約99cm
全長 | 56.5cm
収納サイズ
縦 | 32cm
横 | 約6cm
マチ | 約5cm
重さ | 約260g
素材
ポリエステル100%
6,600円(税込)



本紙記載の展覧会やイベントは、変更・中止となる場合があります。ご来館前に当館ホームページで最新情報をご確認ください。

埼玉県立近代美術館

所在地 | 〒330-0061 埼玉県さいたま市浦和区常盤 9-30-1
TEL | 048-824-0111 FAX | 048-824-0119 MAIL | p240111@pref.saitama.lg.jp
開館時間 | 10:00～17:30(展示室への入場は17:00まで)
休館日 | 月曜日(10/12、11/9、11/23は開館)、年末年始(12/29～1/3)
入館料 | 無料 観覧料 | 上記をご覧ください。

発行 | 埼玉県立近代美術館 編集 | 相馬一行・篠原優 原稿執筆 | (S.A.) 佐藤あゆか / (G.R.) 五味良子 / (H.I.) 平野到 広報協力 | JR 東日本

交通 | JR京浜東北線 北浦和駅西口より徒歩3分(北浦和公園内)。
※当館に専用駐車場はありませんが、提携駐車場「タイムズ 埼玉県立近代美術館東」では駐車料金の割引があります。
お体の不自由な方のご来館には業務用駐車場を提供いたします。
ただし、台数に限りがありますので、事前にご連絡をお願いします。



当館ホームページ



©埼玉県2005



※画像等転載不可